

大村海軍病院

～その物語と幻影～

(その1)

国病久原会 名誉会長

ひろ た のり よし
廣 田 典 祥

1. はじめに

現在の国立病院機構長崎医療センターの壮大な建物は、大村市の西南部、久原丘の台地に立っています。



令和7年（2025）3月 現在の長崎医療センター

その姿は、大村湾の波静かな海面に向かって、両翼を大きくひろげ、尾翼を垂直に伸ばし、いままさに、青空に向かって翔び立とうとする巨鳥を連想させます。緑に溢れる自然の中で、悠然とした時の流れをあるがままに受け入れ、永遠に不変であるかのようです。

ところが、現在の姿は、過去の姿を変貌して出来たのだとは誰も想像できないでしょう。眼前にある病院は長い時間を経て、時代の要請に応えるべく、まるで生き物が脱皮を

繰り返すように、その全容を変え続けて来ました。

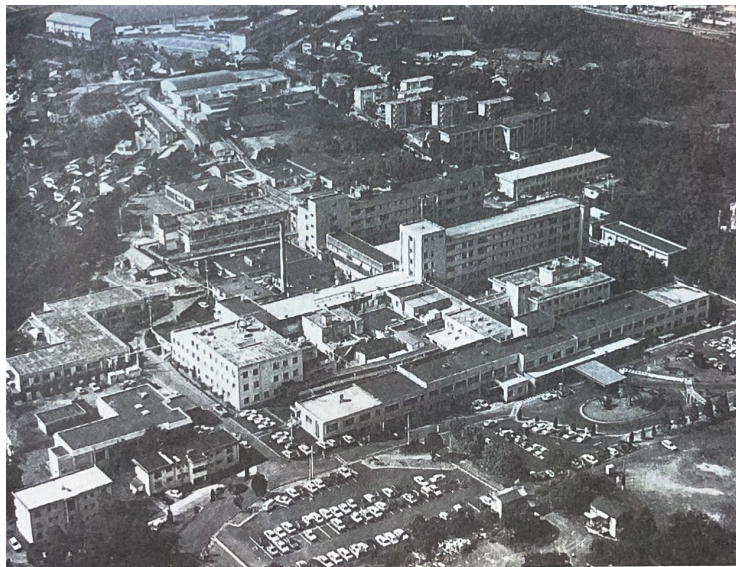
最初は大村海軍病院と呼ばれていました。太平洋戦争で終戦を迎えた1945年に海軍は解体され、厚生省に移管後は国立大村病院となりました。次いで国立長崎中央病院、そして現在の国立病院機構長崎医療センターと名称を変えてきました。その都度、病院の建物も、そこで働く陣容も、病院機能も大きく変化し続けてきたのです。

歴史が否応なしに、病院の姿を変えてゆくのです。

長崎医療センターの歴史も例外ではありません。現在は過去の延長であり、今の人達は先輩の知識・技術の恩恵に浴しながら、仕事をしていることを殆ど意識していないと思うのです。歴代の各院長、各部門の長たちが、営々として作り上げてきた規範、態度、姿勢等も暗黙に継承されてきました。

他方、人々の暮らし、医療に対する期待も普段に変わってきました。そして、いつまでも同じスタイルでは済まされない事態（例: Covid 19 パンデミック）もありうることを最近経験したばかりでした。

この継承と柔軟な変革を織り交ぜながら、時代の流れに素早く対応することは容易ではないが、なんとか遂行できた当院の歴史がありました。



昭和 62 年(1987)2 月当時の 国立長崎中央病院

当医療センターの沿革をたどると、その前身は昭和17年（1942年）「大村海軍病院」として、戦傷病将兵の治療を目的とした医療施設として開設されました。ところが、この病院に、地球史上未曾有の非人道的な戦禍として長崎での原爆投下をうけた、その被災者の救援と治療を担うという想像に絶する災害医療が振りかかってきたのです。

それすらも、地元の人は無論、本院の職員もその史実のことは知らないのではないのでしょうか。

原爆投下の直後、昭和20年(1945)8月15日、日本は第二次世界大戦の敗戦国になりました。

この事態は私達人間に、深刻な警告と教訓を与えました。その事実も、時間の経過とともに、今や過去の幻影かの如く薄れようとしています。

2025年は、終戦後80年。さらに10年後には原爆被災者は僅か数名になるだろうと言われております。原爆被災の実相を今ここで必死に記録として残しておかねばなりません。それで被爆体験者の個々の声やその証言を「今のうちに残そう、聴いておこう」という努力がマスコミ等で繰り返されています。

それとは別の、被爆者を多数収容し、救援してきた個々の医療施設で繰り返されてきた医療の現場の凄惨な記憶も、やがて消え去ろうとしています。そこで救護や医療活動に当たった人々の声を文書として「今こそ残して置く」ことも必要ではないかと思うのです。

つまり、多少でも、被爆体験者の語りを聴くことが出来た者にとっては、新たに「被爆体験伝承者」として、将来に亘ってその物語を途切れることが無く伝えることが責務ではないかと考えます。

この大村海軍病院で働いていた人々は殆ど他界されました。生の声を聞こうと思っても、それは空しい努力でしかありません。だが、個々の声はどこかに文字として、文章として目立つことなく埋もれています。それを発掘し、収集し、編集し、書き物として一つにまとめることは大変な作業ではありますが、あえて挑戦してみました。世に残された資料をまとめ、数少ない著書を読み直して、大村海軍病院の物語を作りたいと存じます。

大村海軍病院は他の海軍病院に比べて、海軍病院としての期間はわずか3年という短い間で終戦を迎えました。それにも拘らず、日本の医療史の観点からみても、いや、世界史的にみても、それまでに人類が、かつて経験したことの無い大災害の医療に遭遇したのです。

大村海軍病院で繰り広げられたこの時の壮絶な物語を史実として残しておくのは今しかないのではないのでしょうか。この文章は大村海軍病院で繰り広げられた、被爆者への救護や治療にまつわる人々の物語を集約し、後世に語り続けられるように、一つの史料にしたいと思います。併せて戦災と原爆被災で亡くなられ御霊に対し深い鎮魂の為の祈りの作業としての気持ちを含めて、纏めてみました。



2. 大村海軍病院の遺構が語る未来への指針

大村海軍病院だった遺構は当院には全くと言って良いほど残っていません。僅かに、
現、長崎医療センターの正門近くの長与専斎(*)の生家、「^{ぎうぎせい}宜雨宜晴亭」の前庭に、当時

の海軍病院の門柱（大村海軍病院記念之門柱）が残っているのみです。その傍に、大村海軍病院に勤めていた OB 会「大村海軍病院会」から寄贈された「 大村海軍病院 顕彰碑(一瀬春駒書)」が残っています。

その碑文を紹介してみましょう。

《この宏大なる久原台地に大村海軍病院が開設されたるは昭和 17 年 10 月 1 日、時あたかも戦時非常の際にして後送せらる、多くの戦傷病将兵の収容治療に当り、特に長崎市に原爆落下の際は、総力を挙げて被災者の救護活動に任じ、徹宵連日に亘り、その数、千七百余名に達せり。その惨たるや名状し難し。開院後、僅か三年にして終戦を迎へ全施設厚生省に移管国立大村病院となり、次いで国立長崎中央病院と拡充改称され現在に至る。爾来三十六年、当時の面影はその片鱗を留めず、僅かに植樹の茂るを見るのみとなれり、茲に大村海軍病院会結成を機に当時の在籍者有志相語り思い出の地にこの碑を建立して漸く忘れ去られんとする本院の果たせし使命を顕彰し、併せて療養中不帰の人となりあるいは本院より前線へ転出して散華されし、幾多の将兵諸子並びに公務遂行中も不幸にして殉職された日赤救護班員の英霊加へて、多くの原爆犠牲者の尊い魂を慰むる鎮魂の碑として永く後世に伝へんと願うものである。

昭和五十六年五月二十四日 発起人一同 >>

この碑文を読むと、大村海軍病院は多くの傷病兵、日赤救護班員の英霊に加え、原爆犠牲者の尊い魂を鎮魂するために建てたとあります。原爆は、まだまだ平和な、幸せな人生を夢見ていた多くの人の命を奪い去りました。その魂を鎮めたいという発起人 OB 達の思いが伝わってきます。これは後世の人たちにも、今立ち止まって、この碑文の思いに共感するとともに、二度と繰り返してはならない決意を促していると思うのです。

碑文は簡単明瞭なだけに、字句通りに読むだけでは、事実の幻影を見ているに過ぎません。石碑とは、表むきでは歴史の記憶遺産、記憶の痕跡でしかありません。その幻影には、もっと深い意味が背後に埋もれているのです。それを読み解いてゆくと、碑文の陰で悲痛と苦闘、医療従事者による不眠不休の献身等、民間との連携姿勢などの深い物語が展開されてきたことに思い馳せることができるのです。

長崎医療センターの正門近くに、「市指定史跡 長与専斎」(*)の門柱があり、ひっそりとした佇まいの古風な和風建築の専斎の旧宅(昭和33年(1958)、現在地に移設)があります。現在の長崎医療センターは病院広報誌のタイトルに「専斎 SENSAI」を用いているのは、我が国の医療制度の指針を固めた先人の業績を偲び、大村市が輩出した偉人の一人を歴史的遺産として後世に伝えたいという意向が含まれているからでしょう。



(*) 長興専斎 (ながよ せんさい)

天保9年(1838)大村藩医の家に生まれ、祖父は天然痘の予防に尽力した長与俊達。緒方洪庵の適塾で蘭学、長崎の医学伝習所で西洋医学を学んだ。明治政府では、岩倉使節団の1人としてヨーロッパを視察。帰国後、内務省衛生局の初代局長となり、伝染病予防や上下水道の整備、近代医療制度を確立、医学の普及に努めました。『衛生』という言葉は、専斎によって作り出されたことで知られています。(大村市歴史資料館写真提供)

現在の国立病院機構長崎医療センターの前身、大村海軍病院は、太平洋戦争が勃発(昭和16年12月8日)する直前、日本海軍佐世保鎮守府管轄下で昭和16年(1941年)11月16日に起工、昭和17年10月1日に開院しました。同地には民家が十数件もありましたが、時節柄、海軍側の供出要請に問題なく応えて同意したと言われております。

世界的に名を馳せた理論物理学者、長岡半太郎博士(*)所有の土地の一部も含まれていました。よって長崎医療センター所在地、久原ヶ丘は同博士のゆかりの地でもあります。



(*) 長岡半太郎 (ながおか はんたろう(1865~1950))

「土星型原子模型」の提唱に代表される世界的な物理学者。父の長岡治三郎とともに上京し、後に東京帝国大学理科大学物理学科に入学。東京帝国大学教授、大阪帝国大学の初代総長を歴任、1937年に第一回文化勲章を受章した。科学は人間により進歩すると考え、弟子たちから「カミナリ親父」と恐れられた指導で後進の育成にも力を注いだ。1939年には湯川秀樹をノーベル賞に推薦しており、後に湯川は日本人初のノーベル物理学賞を受賞した。(大村市歴史資料館写真提供)

海軍が病院として現在地を選んだのは、野戦病院から後送されてくる傷病兵の二次病院として患者を運ぶのに海軍佐世保鎮守府のある佐世保市から比較的近いこと、宏大な病院造成に必要な土地造成が比較的容易なことなどが主な理由でした。

この地に海軍病院を立てるという発想が急速に進んだのは次章で述べますが、実はこれが今日、県央の大村市に大きな医療機関が誕生し、高度な医療に関して伝統を維持できる淵源となったのだと言っても差し支えないでしょう。

歴史に思いを馳せ、未来を切り開くこと、あらゆる試練を克服しつつ不断に成長することが肝要であることを大村海軍病院の遺構がそれを語っていると思います。